草の芽句会だより

NO,164
22 ,4,7

賑やかにパパとブランコ春の城　貞子
青空の音もなく揺れ桜散る

沈丁の香あり娘の部屋閉じしまま　節子
大手門くぐりて見上ぐ花の城

葉桜となりゆく一樹幹太し　純子
見返り坂イロハもみじの若葉萌ゆ

齢得て八十路楽しき花の句座　範子
やわらかき楠の新芽の煙るごと

花の空飛行機雲の筋二つ　禮子
花筏中より鯉の頭見え

城山のいつもの径春惜しむ　剋子
落花舞ふ見返り坂を往き戻り

オープンのカフェに灯ともり春寒し　文子
花冷や箪笥の底に亡母（はは）の帯

出席者　馬場　吉崎　川原　氏家　森　小山
投句者　大黒

城山は青空である。飛行機雲が二本並んで大空を横切り、悠然とした眺めに思わず深呼吸。漆林のベンチに座ると、咲き満ちた花びらがヒラヒラ風に舞い落ちてくる。名残りの花を楽しむ人達の列が後を絶たない。城山の桜は今年も、訪ねる人達を存分に楽しませている。

寒い日が続いた三月であったが、気がつくと庭の片隅に山吹が黄色い花を咲かせている。花ニラの可憐な薄紫がそこここを埋め尽くし、今日はセーターだけでも寒くない。

テレビでは悲惨なウクライナ情報が続いている。憤りで心の傷む日々である。ウクライナの人達に野の花が咲く春はまだ遠いのだろうか。足もとに小さな花をつけた雑草までがなんだか愛おしい。

四月は始まりの季節、炬燵を抜け出して私達も心機一転、又元気に城山を歩きたいと思う。